

# 授業計画(コマシラバス)／指導案 (ガニエの9教授事象を活用して)

科目名	デジタルシティズンシップ	開講年度	令和8年度	単位数	1
学習タイトル(第1回)	なぜ今、デジタルシティズンシップか —「生きる場」としてのデジタルを捉え直す				
学習概要(使用教材・事前学習)	デジタル社会において安全かつ有益に活動するためのリテラシーと態度を養うとともに、自分自身の幸福と他者・社会の幸福をつなげて考える力を育成する。単なる情報モラル教育にとどまらず、情報流通の構造、人間の心理、感情と情報の関係、不都合な真実に向き合う姿勢を扱い、公共性を踏まえた行動選択を実践する。				
学習目標(複数可)	1. デジタル空間が単なる「道具」ではなく、自分たちの「生活の場(社会そのもの)」であることを理解する。 2. 禁止事項を学ぶ「情報モラル」と、主体的関わりを学ぶ「デジタルシティズンシップ」の違いを認識する。 3. 自分のデジタル利用における無意識の行動や身体感覚に「気づく」。				
成績(理解度)評価方法	毎回の問いに対して自分の言葉で書き込んだワークシートが15回分溜まったとき、それが「自分だけの教科書」作成し、毎回の「Sensing(感じる)」で自分の経験に立ち戻り「Thinking(考える)」で構造を客観視し、「Dialog(対話)」で他者の視点を取り入れたプロセスが記録されているかを評価する。				
	指導内容(教員側の働きかけ)	備考	時間		
1.学習者の注意を喚起する(注意をひく、興味を持ってもらう)	【Sensing:感じる】「無意識にスマホを開く瞬間」を問いかける。それは自分の意志か、アプリの設計か？SNS利用後の「疲れ」や「ざわつき」といった身体感覚に注目させる。		10	導入	
2.授業の目標を共有する	【導入】本講座は「使い方の注意」ではなく、この新しい世界で「どう生きるか」を考える場であることを提示する。全15回の「探究の旅」の全体像を共有する。		5		
3.前提条件を思い出させる(以前の学習を思い出してもらう)	導入・注意喚起の中で、日常のスマホ利用経験を想起させることで代える				
4.新しい事項を提示する(学習内容を伝達する)	【情報提示:Thinking】デジタルは人生の半分以上を過ごす「社会そのもの」という視点を提示。「守り」の情報モラルから、「攻め(より良く生きる姿勢)」のデジタルシティズンシップへの転換を説明する。		15	展開	
5.学習の方針を与える(理解を促進する手法を用いる)	【理解の促進】本授業の基本サイクル「Sensing(感じる)→Thinking(考える)→Dialog(対話)」を説明する。正解を教えるのではなく、共に考える「伴走者」としての教員の役割を伝える。		10		
6.練習の機会を作る	【学習活動:Dialog】「今日の内容で、一番『引っかかった』ことは何か？」をテーマにグループ対話を行う。結論を出さず、アドバイスもせず、互いの違いをそのまま受け取る練習とする。		25		
7.フィードバックを与える	【対話の深化】グループで出た意見を全体で共有する。教員は「正解」を示すのではなく、学生の多様な気づきを価値ある「選択肢」として認め、場をファシリテートする。		15	まとめ	
8.学習の成果・達成度を評価する	【まとめ】ワークシートに「今日の自分の気づき」を言語化して記録する。これは15回分蓄積され、最終的に「自分だけの教科書(羅針盤)」となる。		5		
9.保持と転移を高める(次の単元への興味をわかせる、忘れないような工夫をする)	【次回予告】デジタルは個人の「安心」を学習しているという構造(フィルターバブル等)に触れ、次回の「SNS疲れと仕組み」への興味を繋げる。		5		
			合計	90	分

# 授業計画(コマシラバス)／指導案 (ガニエの9教授事象を活用して)

科目名	デジタルシティズンシップ	開講年度	令和8年度	単位数	1
学習タイトル(第2回)	SNS疲れは、なぜ起きるのか — 個人の問題から「しくみ」の問題へ				
学習概要(使用教材・事前学習)	デジタル社会において安全かつ有益に活動するためのリテラシーと態度を養うとともに、自分自身の幸福と他者・社会の幸福をつなげて考える力を育成する。単なる情報モラル教育にとどまらず、情報流通の構造、人間の心理、感情と情報の関係、不都合な真実に向き合う姿勢を扱い、公共性を踏まえた行動選択を実践する。				
学習目標(複数可)	1. SNS疲れが個人の性格や自制心の欠如ではなく、アプリの設計(構造)によって引き起こされていることを理解する。 2. 「比較の自動化」や「承認の数値化」といった具体的なメカニズムを自分の経験と紐付けて言語化できる。 3. 構造を理解した上で、自分なりに「楽に」付き合うための主体的な選択肢を考えられる。				
成績(理解度)評価方法					
	指導内容(教員側の働きかけ)	備考	時間		
1.学習者の注意を喚起する (注意をひく、興味を持ってもらう)	【Sensing:感じる】最近、SNSを見ていて「ちょっと疲れたな」と感じた瞬間を思い出し、その時の身体感覚や気分(ざわつき、無力感、焦りなど)に注目させる。		10		
2.授業の目標を共有する	【導入】本日のゴールは、疲れを「自分のせい」にせず、デジタルの「構造」から捉え直すことで、自分なりの距離感を取り戻すことであると伝える。		5	導入	
3.前提条件を思い出させる (以前の学習を思い出してもらう)	(第1回の「デジタルは生活の場である」という視点を導入の中で想起させる)				
4.新しい事項を提示する (学習内容を伝達する)	【Thinking:構造の提示】SNS疲れを生む4つの構造を提示:①比較が自動で起きる仕組み、②承認が数値化される仕組み、③終わりが無い(無限スクロール)仕組み、④感情が伝染する仕組み。		10	情報提示 展開	
5.学習の方針を与える (理解を促進する手法を用いる)	【理解の促進】「アテンション・エコノミー(関心の経済)」という概念を紹介し、ユーザーを画面に釘付けにする設計意図を客観的に解説する。気づくこと自体が力になることを強調する。		10		
6.練習の機会を作る	【学習活動:Dialog】1. ペアインタビュー:自身の疲れの経験を話し、「疲れの正体」を言語化する(10分)。2. グループ対話:「やめる」以外でSNSと「楽に」付き合うための選択肢を出し合う(15分)。		25	学習活動	
7.フィードバックを与える	対話の深化]各グループで出た「楽に付き合う知恵」を共有する。教員は「正解」を提示せず、多様な選択肢を学生が自分の「羅針盤(判断基準)」に取り入れるサポートをする。		15		
8.学習の成果・達成度を評価する	【まとめ】ワークシートに、今日の学びを通じて発見した「自分なりのSNSとの向き合い方」を記録する。		10	まとめ	
9.保持と転移を高める (次の単元への興味をわかせる、忘れないような工夫をする)	【次回予告】自分の行動(または沈黙)がデジタル空間でどのようなメッセージや影響力を持つのか、次回のテーマ「影響力と沈黙」へと興味を繋げる。		5		
			合計	90	分

# 授業計画(コマシラバス)／指導案 (ガニエの9教授事象を活用して)

科目名	デジタルシティズンシップ	開講年度	令和8年度	単位数	1
学習タイトル(第3回)	見えている世界は、本当に世界か ― 情報のカスタマイズと分断の構造				
学習概要(使用教材・事前学習)	デジタル社会において安全かつ有益に活動するためのリテラシーと態度を養うとともに、自分自身の幸福と他者・社会の幸福をつなげて考える力を育成する。単なる情報モラル教育にとどまらず、情報流通の構造、人間の心理、感情と情報の関係、不都合な真実に向き合う姿勢を扱い、公共性を踏まえた行動選択を実践する。				
学習目標(複数可)	1. 自分のタイムラインがアルゴリズムによって自分専用に調整された特殊な世界であることを理解する。 2. 「学習・集中・排除」という情報のパーソナライズの仕組みを、自分の日常と紐付けて説明できる。 3. 構造を知ること、心地よい世界の外側にある「未知の景色」を想像する主体性を育む。				
成績(理解度)評価方法					
	指導内容(教員側の働きかけ)	備考	時間		
1.学習者の注意を喚起する (注意をひく、興味を持ってもらう)	【Sensing:感じる】スマホを出して最近よく目にする情報やテーマを書き出し、それを目にするとどんな気分(心地よさ、安心感など)になるかに注目させる。		10	導入	
2.授業の目標を共有する	導入]同じ教室にいても見ている景色の違いを認識し、本日のゴールは「タイムラインという自分専用の世界」の構造を客観的に捉えることだと提示する。		5		
3.前提条件を思い出させる (以前の学習を思い出してもらう)	(導入の中で、第1回の「デジタルは社会そのもの」や第2回の「プラットフォームの設計」という視点を想起させる)v				
4.新しい事項を提示する (学習内容を伝達する)	【情報提示:Thinking】「フィルターバブル」や「エコーチェンバー」といった概念を紹介し、アルゴリズムが反射的な反応を「学習」して似た情報を「集中」させ、違う意見を「排除」する仕組みを解説する。		10	展開 情報提示 学習活動	
5.学習の方針を与える (理解を促進する手法を用いる)	【理解の促進】デジタルは依存を学習しているのではなく、私たちの「安心」を学習しているという視点を提示し、構造を知ることが主体性を取り戻す第一歩であることを強調する。		10		
6.練習の機会を作る	【学習活動:Dialog】「もし今、自分があまり見ていない世界(不安になりそうなこと、自分とは合わないようなこと)があるとしたら、それはどんな世界か？」をテーマにグループ対話を行う。		25		
7.フィードバックを与える	対話の深化]グループで出た「未知の世界」を全体で共有し、正解を出すのではなく、情報の断片から推測や偏見が生まれる「ズレ」を自覚するプロセスの価値を認める。		15		
8.学習の成果・達成度を評価する	<input checked="" type="checkbox"/> 【まとめ】ワークシートに、今日の学びを通じて感じた「自分の情報収集における羅針盤(これからの情報の付き合い方)」を言語化して記録する。		10	まとめ	
9.保持と転移を高める (次の単元への興味をわかせる、忘れないような工夫をする)	【次回予告】このように形づくられた世界の中で、私たちの具体的な「行動や沈黙」がどのような影響を与えているかを考える、次回のテーマ「影響力」へと興味を繋げる。		5		
			合計	90	分

# 授業計画(コマシラバス)／指導案 (ガニエの9教授事象を活用して)

科目名	デジタルシティズンシップ	開講年度	令和8年度	単位数	1
学習タイトル(第4回)	見えている世界は、本当に世界か — 情報のカスタマイズと分断の構造				
学習概要(使用教材・事前学習)	デジタル社会において安全かつ有益に活動するためのリテラシーと態度を養うとともに、自分自身の幸福と他者・社会の幸福をつなげて考える力を育成する。単なる情報モラル教育にとどまらず、情報流通の構造、人間の心理、感情と情報の関係、不都合な真実に向き合う姿勢を扱い、公共性を踏まえた行動選択を実践する。				
学習目標(複数可)	1. 自分のタイムラインがアルゴリズムによって自分専用に調整された特殊な世界であることを理解する。 2. 「学習・集中・排除」という情報のパーソナライズの仕組みを、自分の日常と紐付けて説明できる。 3. 構造を知ること、心地よい世界の外側にある「未知の景色」を想像する主体性を育む。				
成績(理解度)評価方法					
	指導内容(教員側の働きかけ)	備考	時間		
1.学習者の注意を喚起する (注意をひく、興味を持ってもらう)	【Sensing:感じる】スマホを出して、最近よく目にしてしている情報やテーマ(美容、勉強、推しなど)を書き出し、それを目にするとうどんな気分になるか注目させる。		10	導入	
2.授業の目標を共有する	【導入】同じ教室にいても一人ひとり見ている「世界」の景色が異なる事実を提示し、本日のゴールは「自分専用の世界」が形づくられる構造を知ることだと伝える。		5		
3.前提条件を思い出させる (以前の学習を思い出してもらう)	(導入の中で、第1回の「デジタルは生活の場」という視点や第2回のプラットフォームの設計意図を想起させることで代える)				
4.新しい事項を提示する (学習内容を伝達する)	【情報提示:Thinking】デジタル空間で起きている3つの構造を解説。①反射的な反応を「学習」する、②似た情報を「集中」させ心地よいバブルを作る、③違う意見を「排除」し不在にすら気づかせない。		10	展開	
5.学習の方針を与える (理解を促進する手法を用いる)	【理解の促進】「フィルターバブル」や「エコーチェンバー」という概念を紹介。デジタルは私たちの「依存」ではなく「安心」を学習しているという視点を与え、構造を知ることが主体性を取り戻す第一歩であることを強調する。		10		
6.練習の機会を作る	【学習活動:Dialog】グループ対話を行う。問い:「もし今、自分があまり見ていない世界(見たら不安になりそうなこと、自分とは合わないようなこと)があるとしたら、それはどんな世界だと思う?」		25	学習活動	
7.フィードバックを与える	【対話の深化】各グループで出た「未知の世界」を全体で共有する。教員は正解を出すのではなく、情報の断片から推測や偏見が生まれる「ズレ」を自覚するプロセスの価値を認める。		15		
8.学習の成果・達成度を評価する	【まとめ】ワークシートに、今日の学びを通じて感じた「自分の情報収集における羅針盤(これからの情報との付き合い方)」を言語化して記録する。		10	まとめ	
9.保持と転移を高める (次の単元への興味をわかせる、忘れないような工夫をする)	【次回予告】このように形づくられた世界の中で、私たちの具体的な「行動や沈黙」がどのような影響を与えているかを考える、次回のテーマ「影響力」へと興味を繋げる。		5		

合計 90分

# 授業計画(コマシラバス)／指導案 (ガニエの9教授事象を活用して)

科目名	デジタルシティズンシップ	開講年度	令和8年度	単位数	1
学習タイトル(第5回)	誤解はどこから生まれるのか — 自分の認知と言葉の手前を見る				
学習概要(使用教材・事前学習)	デジタル社会において安全かつ有益に活動するためのリテラシーと態度を養うとともに、自分自身の幸福と他者・社会の幸福をつなげて考える力を育成する。単なる情報モラル教育にとどまらず、情報流通の構造、人間の心理、感情と情報の関係、不都合な真実に向き合う姿勢を扱い、公共性を踏まえた行動選択を実践する。				
学習目標(複数可)	1. デジタル上の「モヤっと」する感覚の正体が、言葉になる前の未分化な感情であることを理解する。 2. 「冰山モデル」を通じ、強い言葉(怒り)の奥に不安や悲しみなどの「本当の気持ち」が隠れている構造を学ぶ。 3. 強い言葉は感情の大きさではなく「言葉の不足」から生まれることを認識し、感情を言語化する重要性に気づく。				
成績(理解度)評価方法					
	指導内容(教員側の働きかけ)	備考	時間		
1.学習者の注意を喚起する(注意をひく、興味を持ってもらう)	【Sensing:感じる】最近デジタル上で感じた「モヤっと」「イラっと」した出来事の一つを思い出し、その時の言葉にならない感覚に注目させる。		10	導入	
2.授業の目標を共有する	【導入】本日のゴールは、誤解を「相手のせい」にする前に、自分の認知と言葉の手前にある「ズレ」を客観的に捉えることだと提示する。		5		
3.前提条件を思い出させる(以前の学習を思い出してもらう)	(導入の中で、第4回の「沈黙や反応もメッセージである」という関係者としての立ち位置を想起させる)				
4.新しい事項を提示する(学習内容を伝達する)	【情報提示:Thinking】「冰山モデル」を紹介。怒りの奥には不安や寂しさが混ざっていること、強い言葉は「気持ちが『大きい』」からではなく言葉が「足りない」ときに出る」という構造を解説する。		10	情報提示	
5.学習の方針を与える(理解を促進する手法を用いる)	【理解の促進】「感情(フィーリング)リスト」を提示し、未分化な感情に名前をつける練習方法を伝える。感情を分解することが冷静さや自己理解に繋がることを説明する。		10		
6.練習の機会を作る	【学習活動:Dialog】ワーク「言葉と気持ちのギャップを話す」。最初に浮かんだ「強い言葉(例:は?)」と、リストを見て見つけ出した「奥にある本当の気持ち」を比較し、ペアで共有する。		25	学習活動	
7.フィードバックを与える	【対話の深化】「もしその気持ちを丁寧な言葉で表せていたら、SNSの空気はどう変わっていたか？」を全体で問いかけ、多様な視点や可能性をフィードバックする。		15		
8.学習の成果・達成度を評価する	【まとめ】ワークシートに「誤解は自分の内側(認知と言葉の手前)から始まっている」という気づきと、今後の情報の受け取り方の変化を記録する。		10	まとめ	
9.保持と転移を高める(次の単元への興味をわかせる、忘れないような工夫をする)	【次回予告】自分の中の「小さなズレ」が多くの人の間で同時に起きたとき、どのように「社会的事実(炎上など)」になっていくのか、次回のテーマへと繋げる。		5		
			合計	90	分

# 授業計画(コマシラバス)／指導案 (ガニエの9教授事象を活用して)

科目名	デジタルシティズンシップ	開講年度	令和8年度	単位数	1
学習タイトル(第6回)	あいまいな情報の連鎖を読み解くー 誤解はどう広がり、社会的事実になるのか				
学習概要(使用教材・事前学習)	デジタル社会において安全かつ有益に活動するためのリテラシーと態度を養うとともに、自分自身の幸福と他者・社会の幸福をつなげて考える力を育成する。単なる情報モラル教育にとどまらず、情報流通の構造、人間の心理、感情と情報の関係、不都合な真実に向き合う姿勢を扱い、公共性を踏まえた行動選択を実践する。				
学習目標(複数可)	1. デジタル空間において、個人の「小さな判断や沈黙」が積み重なり、アルゴリズムを通じて「社会的事実」として固定されていく構造を理解する。 2. 情報の形式や検索順位が、どのように受け手の「誤解の余地」を生み出しているかを客観的に分析できる。 3. 悪意がなくても誤解が広まるメカニズムを知り、自分自身の反応(または非反応)が持つ影響力を自覚する。				
成績(理解度)評価方法					
	指導内容(教員側の働きかけ)	備考	時間		
1. 学習者の注意を喚起する (注意をひく、興味を持ってもらう)	【Sensing:感じる】不確かな噂(物騒な事件に関わっていたらしい等)がSNSで広まっているケースを提示する。証拠はないが反応が集まり、検索上位にまとめサイトがある状況で、自分ならどう感じ、どう動くか(信じる・疑う・何もしない等)を直感的に考えさせる。		10	導入	
2. 授業の目標を共有する	【導入】本日のゴールは、個人の小さな判断や沈黙が、デジタル空間でどのように「社会的事実」へと編み上げられていくかの構造を理解することだと提示する。		5		
3. 前提条件を思い出させる (以前の学習を思い出してもらう)	(導入の中で、第5回の「誤解は自分の内側(認知と言葉の手前)から始まっている」という視点を想起させる)				
4. 新しい事項を提示する (学習内容を伝達する)	【Thinking:構造の提示】どこに「誤解の余地」があったかを分解: ①「らしい」等のあいまいな表現、②最初に強い噂が目に入る初頭効果、③検索順位を評価と誤認する錯誤、④事実と意見の境界の消失、の4点を解説する。		10	展開	
5. 学習の方針を与える (理解を促進する手法を用いる)	【理解の促進】「沈黙は中立ではない」という視点を提示。反応しないことが現状維持や同調のサインとして機能し、アルゴリズムに「履歴」として固定されていく「累積」の構造を解説する。		10		
6. 練習の機会を作る	【学習活動:Dialog】グループ対話。問い:「もし噂の場面に遭遇したら、自分はなぜその反応(または沈黙)を選びそうか?」。怖さ、場の空気、無関心など、自分の判断の背景にある「迷い」を言語化して共有する。		25	学習活動	
7. フィードバックを与える	【対話の深化】グループの意見を全体で共有。多くの場合、誤解は「悪意」からではなく、個人の「普通の反応」や「迷い」の積み重ねによって静かに、しかし確実に広がってしまう事実を確認する。		15		
8. 学習の成果・達成度を評価する	【まとめ】ワークシートに、今日の学びを通じて感じた「情報の連鎖の中で自分が意識したいこと」を言語化して記録する。		10	まとめ	
9. 保持と転移を高める (次の単元への興味をわかせる、忘れないような工夫をする)	【次回予告】誤解が広がりやすい世界で、それを最小限にするための「知恵」としての次回のテーマ「デジタルエチケット」へと興味を繋げる。		5		

合計 90分

# 授業計画(コマシラバス)／指導案 (ガニエの9教授事象を活用して)

科目名	デジタルシティズンシップ	開講年度	令和8年度	単位数	1
学習タイトル(第7回)	正しさではなく、想像力の技術 — デジタルエチケットとは何か				
学習概要(使用教材・事前学習)	デジタル社会において安全かつ有益に活動するためのリテラシーと態度を養うとともに、自分自身の幸福と他者・社会の幸福をつなげて考える力を育成する。単なる情報モラル教育にとどまらず、情報流通の構造、人間の心理、感情と情報の関係、不都合な真実に向き合う姿勢を扱い、公共性を踏まえた行動選択を実践する。				
学習目標(複数可)	1. デジタルエチケットが、外側から決められた「マナー」ではなく、状況に応じて振る舞いを選ぶ「自律的な知恵」であることを理解する。 2. デジタル空間において「表情・関係性・文脈」が見えにくいという構造的特徴を認識し、なぜ想像力が必要なのかを説明できる。 3. 自分の判断基準となる「デジタル羅針盤(自分なりの振る舞い)」を言語化できる。				
成績(理解度)評価方法					
	指導内容(教員側の働きかけ)	備考	時間		
1.学習者の注意を喚起する (注意をひく、興味を持ってもらう)	【Sensing:感じる】最近、SNSで「いいね」やコメントをする際、あるいはスルーする際に「どう反応すべきか迷った瞬間」を一つ思い出させる。その迷いの背景(誤解への不安、相手を傷つけない等)に注目させる。		10	10	
2.授業の目標を共有する	【導入】本日のゴールは、デジタルエチケットを「正解」ではなく、誤解を最小限にするための「想像力の技術」として捉え直すことであると提示する。		5		
3.前提条件を思い出させる (以前の学習を思い出してもらう)	(導入の中で、第6回の「不確かな情報の連鎖と誤解の構造」を想起させ、その対策としてのエチケットの必要性を繋げる)				
4.新しい事項を提示する (学習内容を伝達する)	【Thinking:分解する】「マナー(外的な型)」と「デジタルエチケット(内的な知恵)」の違いを解説。デジタル空間で想像力が必要な3つの理由(表情、関係性、文脈の欠如)を提示する。		10	展開	
5.学習の方針を与える (理解を促進する手法を用いる)	【理解の促進】具体的な振る舞いの知恵を例示する。断定を避ける(アイ・メッセージ)、強い感情の時は一度止まる、公開と私の場を区別するなどの手法を、その理由(構造)と共に解説する。		10		
6.練習の機会を作る	【学習活動:Dialog】ワーク:私の「デジタル羅針盤」。自分が大事にしたいデジタルでの振る舞いを、一つだけ言葉にする(例:「迷ったら一度止まる」など)。		25		
7.フィードバックを与える	【対話の深化】グループで「羅針盤」を共有し合う。説得や評価ではなく、自分とは違う判断を知ること「社会の多様な知恵」として味わうルール(なるほど、で止める)を徹底する。		15		
8.学習の成果・達成度を評価する	【まとめ】「迷いながら選ぶこと自体が、すでにエチケットを実践している証である」という本質を確認し、ワークシートに本日の学びを記録する。		10	まとめ	
9.保持と転移を高める (次の単元への興味をわかせる、忘れないような工夫をする)	【次回予告】自分を守り、他者の領域を尊重するための「デジタル境界線」へと視点を広げる、次回のテーマ(第8回)へと興味を繋げる。		5		

合計 90分

# 授業計画(コマシラバス)／指導案 (ガニエの9教授事象を活用して)

科目名	デジタルシティズンシップ	開講年度	令和8年度	単位数	1
学習タイトル(第8回)	構造の理解から自分なりの実践へ — 5～7回のまとめと対話				
学習概要(使用教材・事前学習)	デジタル社会において安全かつ有益に活動するためのリテラシーと態度を養うとともに、自分自身の幸福と他者・社会の幸福をつなげて考える力を育成する。単なる情報モラル教育にとどまらず、情報流通の構造、人間の心理、感情と情報の関係、不都合な真実に向き合う姿勢を扱い、公共性を踏まえた行動選択を実践する。				
学習目標(複数可)	1. デジタル空間に存在する「ズレ」と「余白」の構造を、自分の具体的な経験と紐付けて言語化できる。 2. 他者の断片的な情報から生じる「推測」を体験することで、情報の少なさが誤解を生むプロセスを客観視できる。 3. 構造を理解した上で、主体的に関わり方を選び続ける「デジタルシティズン」としての姿勢を再確認する				
成績(理解度)評価方法					
	指導内容(教員側の働きかけ)	備考	時間		
1.学習者の注意を喚起する (注意をひく、興味を持ってもらう)	【振り返り:Sensing】第5回～7回(誤解・沈黙・エチケット)のスライドや、自分がこれまでに書いたワークシートを眺め、印象に残っている言葉や感覚を思い出す。		10	導入	
2.授業の目標を共有する	【導入】本日は「構造の理解」のまとめとして、知識を自分のものにするために「自分の言葉で捉え直す」ことがゴールであることを伝える。		5		
3.前提条件を思い出させる (以前の学習を思い出してもらう)	(導入の振り返りの中で、これまでの各テーマの核心を想起させることで代える)				
4.新しい事項を提示する (学習内容を伝達する)	【ワーク説明:Thinking】「6キーワード・ワーク」を提示。直感で6マスにキーワードを書く。それは自分のデジタルでのあり方を示す「断片」であることを説明する。		10	展開	
5.学習の方針を与える (理解を促進する手法を用いる)	【ワーク準備】ペアをつくり、相手のキーワードのみを見て「この人はどんな悩みがあり、何を大切にしているか」を勝手に想像する際の観点(活用頻度、悩み、価値観など)を提示する。		10		
6.練習の機会を作る	【学習活動:Dialog】①相手の6マスを見て勝手な想像を口に出す(3分)②本人による6マスの意図解説と、想像に対するフィードバック(5分)※これらを複数回繰り返し、多様な視点に触れる。		25	学習活動	
7.フィードバックを与える	【対話の深化】「キーワードから想像が広がったのはなぜか?」「現実のデジタル空間でのズレとどう共通するか?」を問いかけ、情報の少なさを推測で埋める構造を全体で共有する。		15		
8.学習の成果・達成度を評価する	【まとめ】デジタルは常に「ズレ」と「余白」が共存する場所であり、その限界を引き受けながら関わり方を選び続けることがデジタルシティズンシップである、という本質をまとめる。		10	まとめ	
9.保持と転移を高める (次の単元への興味をわかせる、忘れないような工夫をする)	【次回予告】これまでの「影と構造」から視点を反転させ、次回(第9回)からはデジタルが持つ「世界を広げるポジティブな可能性」へと進むことを予告する。		5		
			合計	90	分

# 授業計画(コマシラバス)／指導案 (ガニエの9教授事象を活用して)

科目名	デジタルシティズンシップ	開講年度	令和8年度	単位数	1
学習タイトル(第9回)	デジタルは社会にどんな良い変化を起こしてきたか — 可能性を事例から観察する				
学習概要(使用教材・事前学習)	デジタル社会において安全かつ有益に活動するためのリテラシーと態度を養うとともに、自分自身の幸福と他者・社会の幸福をつなげて考える力を育成する。単なる情報モラル教育にとどまらず、情報流通の構造、人間の心理、感情と情報の関係、不都合な真実に向き合う姿勢を扱い、公共性を踏まえた行動選択を実践する。				
学習目標(複数可)	1. デジタルが個人のリスクだけでなく、社会にポジティブな変化をもたらす「力」であることを理解する。 2. 災害支援や社会課題の可視化といった具体事例から、良い変化が起きる構造を客観的に分析できる。 3. 「炎上」と「良い拡散」の違い(動機、言葉選び、対話の余地)を認識し、自らの主体的な関わり方を考えられる。				
成績(理解度)評価方法					
	指導内容(教員側の働きかけ)	備考	時間		
1. 学習者の注意を喚起する (注意をひく、興味を持ってもらう)	【Sensing:感じる】問いかけ:「SNSがあったおかげで、誰かを助けたり、助けられたりした経験(迷子犬の捜索協力など)はありますか?」。身近なポジティブ体験を思い出し、デジタルが持つ善意の側面へ意識を向ける。		10	導入	
2. 授業の目標を共有する	【導入】本日のゴールは、デジタルの力を「社会を良くする方向」にどう使うかを事例から学ぶことだと提示する。講座の後半戦(第9回～15回)は「視点の反転」がテーマであることを伝える。		5		
3. 前提条件を思い出させる (以前の学習を思い出してもらう)	(導入の中で、第1回～8回で学んだ「リスクや構造」の理解があるからこそ、主体的に「可能性」を選び取れることを想起させる)				
4. 新しい事項を提示する (学習内容を伝達する)	【Thinking:事例の提示】実在事例(災害時の寄付の連鎖、難病支援のアイスバケツチャレンジ、#MeTooによる社会課題の可視化、クラウドファンディングなど)を紹介し、事実を客観的に観察させる。		10	情報提示	
5. 学習の方針を与える (理解を促進する手法を用いる)	【理解の促進】「広がり方」の比較観点を解説。「炎上」と「良い拡散」では、発端の動機、使われる言葉(強い断定か、問いかけか)、対話の余地がどう違うのかを構造的に示す。		10		
6. 練習の機会を作る	【学習活動:Thinking & Dialog】ワーク:もし自分が「地域で愛される図書館の閉鎖」を止めるために声を上げるなら、250文字でどう発信するか。相手を攻撃せず、共感や願いをどう差し出すかを考え、個人ワークの後にペアで共有する。		25	学習活動	
7. フィードバックを与える	【対話の深化】全体共有。他者の発信案を聞き、「どの言葉なら安心して受け取れるか」「どこに対話の余白があるか」を話し合う。教員は、正解を教えるのではなく、多様な表現の可能性を肯定する。		15		
8. 学習の成果・達成度を評価する	【まとめ】「デジタルの『色』を決めるのは人の関わり方である」という本質をまとめ、ワークシートに「自分ならどうこの力を使いたいか」という主体的姿勢を記録する。		10	まとめ	
9. 保持と転移を高める (次の単元への興味をわかせる、忘れないような工夫をする)	【次回予告】次回はさらに踏み込み、「なぜあの人の言葉は嫌にならないのか」という、良い影響が生まれるコミュニケーションの具体的な「条件」について探究することを予告する。		5		
			合計	90	分

# 授業計画(コマシラバス)／指導案 (ガニエの9教授事象を活用して)

科目名	デジタルシティズンシップ	開講年度	令和8年度	単位数	1
学習タイトル(第10回)	良い影響が生まれる条件とは何か — なぜこの人の言葉は嫌にならないのか				
学習概要(使用教材・事前学習)	デジタル社会において安全かつ有益に活動するためのリテラシーと態度を養うとともに、自分自身の幸福と他者・社会の幸福をつなげて考える力を育成する。単なる情報モラル教育にとどまらず、情報流通の構造、人間の心理、感情と情報の関係、不都合な真実に向き合う姿勢を扱い、公共性を踏まえた行動選択を実践する。				
学習目標(複数可)	1. デジタル上の「良い影響」は特別な能力ではなく、具体的な「関わり方の条件」の積み重ねであることを理解する。 2. 「ユー・メッセージ」と「アイ・メッセージ」の違いを理解し、相手を否定しない「余白」のある伝え方を習得する。 3. 自分のコミュニケーションにおいて、意識すべき「デジタル羅針盤(留意点)」を言語化できる。				
成績(理解度)評価方法					
	指導内容(教員側の働きかけ)	備考	時間		
1.学習者の注意を喚起する (注意をひく、興味を持ってもらう)	【Sensing:感じる】スマホを出し、5分間でSNS等から「この人の言葉は嫌じゃない」「読んでいて疲れない」と感じる投稿を一つ探す。内容の良し悪しではなく「言い方」に注目させる。		10	導入	
2.授業の目標を共有する	【導入】本日のゴールは、良い影響を「性格」の問題にせず、安心感を生む言葉の「構造」として捉え直し、自分の技術にすることだと提示する。		5		
3.前提条件を思い出させる (以前の学習を思い出してもらう)	(第9回で学んだ「デジタルは人の関わり方で色が決まる」という視点や、これまでの「情報の少なさによる誤解」の構造を想起させる)				
4.新しい事項を提示する (学習内容を伝達する)	【情報提示:Thinking】「嫌じゃなかった理由」の構造を解説。断定せず立場を明示する、感情の背景を説明する、事実を共有するといった「心の防衛を解く」4つの条件を提示する。		10	情報提示	
5.学習の方針を与える (理解を促進する手法を用いる)	【理解の促進】主語を意識する「アイ・メッセージ(私は～と感じる)」の手法を紹介。デジタルは文字情報の少なさから「決めつけ」に弱いため、相手に「余白」を残す伝え方が重要であることを説明する。		10		
6.練習の機会を作る	【学習活動:Dialog】ワーク:具体的な「書き換え」練習。例「既読スルーするなんて失礼だよ！」をアイ・メッセージに変換し、その後、自分が意識したい留意点を選びペアやグループで共有する。		25	学習活動	
7.フィードバックを与える	【対話の深化】各グループで出た「大切にしたいこと」を全体で共有する。教員は「正しい伝え方一つではない」ことを強調し、多様な選択肢を価値として認めるフィードバックを行う。		15		
8.学習の成果・達成度を評価する	【まとめ】「良い影響は、嫌にならない関わり方の積み重ねから生まれる」という本質を確認し、ワークシートに本日の学びと「自分の羅針盤」を記録する。		10	まとめ	
9.保持と転移を高める (次の単元への興味をわかせる、忘れないような工夫をする)	【次回予告】言葉の「トーン」だけでなく、人にはそれぞれ好む「コミュニケーションのスタイル(実行派・調和派など)」があることを予告し、次回の診断ワークへの興味を繋げる。		5		
			合計	90	分

# 授業計画(コマシラバス)／指導案 (ガニエの9教授事象を活用して)

科目名	デジタルシティズンシップ	開講年度	令和8年度	単位数	1
学習タイトル(第11回)	コミュニケーションのスタイル — 私やあの人は何を好むのか				
学習概要(使用教材・事前学習)	デジタル社会において安全かつ有益に活動するためのリテラシーと態度を養うとともに、自分自身の幸福と他者・社会の幸福をつなげて考える力を育成する。単なる情報モラル教育にとどまらず、情報流通の構造、人間の心理、感情と情報の関係、不都合な真実に向き合う姿勢を扱い、公共性を踏まえた行動選択を実践する。				
学習目標(複数可)	1. 自分のコミュニケーションスタイル(ソーシャルスタイル)を客観的に把握し、その特徴を言語化できる。 2. デジタル空間での「冷たい」「遅い」といった振る舞いが、悪意ではなくスタイルの違い(構造)から生じている可能性を理解する。 3. 自分と異なるスタイルを持つ他者に対し、対話のチャンネルを調整しようとする主体的姿勢(シチズンシップ)を持つ。				
成績(理解度)評価方法					
	指導内容(教員側の働きかけ)	備考	時間		
1.学習者の注意を喚起する (注意をひく、興味を持ってもらう)	【Sensing:感じる】チャットで届いた「それ、前にも言ったよね」という一言を提示する。その言葉をどう受け取り、相手にどんな意図を想像するか(怒り、確認、効率化など)を直感的に書き出させる。		10	導入	
2.授業の目標を共有する	【導入】本日のゴールは、「正しい伝え方は一つではない」ことを知り、自分と他者の「スタイルの違い」という構造を理解することで、デジタルでの関わり方を楽にすることだと提示する。		5		
3.前提条件を思い出させる (以前の学習を思い出してもらう)	(導入の中で、第10回の「アイ・メッセージ」など相手に余白を残す伝え方を想起させることで代える)				
4.新しい事項を提示する (学習内容を伝達する)	【情報提示:Thinking】4つのソーシャルスタイル(実行派・直感派・調和派・思考派)を紹介する。それぞれのスタイルがデジタル上でどのような振る舞い(短文、スタンプ多用、返信の保留など)を好み、何を大切にしているかを解説する。		10	展開	
5.学習の方針を与える (理解を促進する手法を用いる)	【理解の促進:診断ワーク】チェックリストを用いて、学生自身のスタイルを診断させる。自分の傾向に名前をつけ、それがデジタルでの自分の振る舞いとどう一致しているかを確認させる。		10		
6.練習の機会を作る	【学習活動:Dialog】グループ対話。①自分のスタイルと具体的なエピソードの共有、②自分とは合わないスタイルを持つ人に対して「気をつけたい」と思うことを話し合う。		25		
7.フィードバックを与える	【対話の深化】「相手に悪意がなかったとしたら、どんなスタイルの違いが考えられるか？」を全体で再考する。既読スルーや冷たい指示も、相手の「正確さ重視」や「効率重視」の表れかもしれないという視点をフィードバックする。		15		
8.学習の成果・達成度を評価する	【まとめ】「正しい伝え方は一つではなく、対話のチャンネルを調整し続ける姿勢こそがシチズンシップである」という本質をまとめ、ワークシートに本日の気づきを記録する。		10	まとめ	
9.保持と転移を高める (次の単元への興味をわかせる、忘れないような工夫をする)	【次回予告】これまでの「理解する学び」を終え、次回(第12回)からは自分の学びを言葉にして発信する、最終フェーズ「実践」へ進むことを予告する。		5		

合計 90分

# 授業計画(コマシラバス)／指導案 (ガニエの9教授事象を活用して)

科目名	デジタルシティズンシップ	開講年度	令和8年度	単位数	1
学習タイトル(第12回)	言葉にしてみる ― 私はどんなデジタルシチズンでありたいか				
学習概要(使用教材・事前学習)	デジタル社会において安全かつ有益に活動するためのリテラシーと態度を養うとともに、自分自身の幸福と他者・社会の幸福をつなげて考える力を育成する。単なる情報モラル教育にとどまらず、情報流通の構造、人間の心理、感情と情報の関係、不都合な真実に向き合う姿勢を扱い、公共性を踏まえた行動選択を実践する。				
学習目標(複数可)	<ol style="list-style-type: none"> <li>これまでの学びを振り返り、自分にとって大切なデジタルとの向き合い方を「自分の言葉」で結晶化できる。</li> <li>SNS(瞬間的・断定)とnote(プロセス・迷い)の特性の違いを理解し、発信内容に適した場を選択できる。</li> <li>正解や説得のためではなく、誰かにそっと届けるための誠実な言葉を紡ぐ練習をする。</li> </ol>				
成績(理解度)評価方法					
	指導内容(教員側の働きかけ)	備考	時間		
1.学習者の注意を喚起する (注意をひく、興味を持ってもらう)	【Sensing:感じる】第1回から11回までの旅を振り返るスライドを提示。手元のペンやスマホを見つめ、今日から「理解する学び」から「関わってみる学び」へとフェーズが変わることを体感的に伝える。		10	導入	
2.授業の目標を共有する	【導入】本日のゴールは「正解を書くこと」ではなく、少し先の誰かにそっと届く言葉を置く準備をすることだと提示する。全15回の旅のクライマックスに向けた「宣言」の第一歩であることを共有する。		5		
3.前提条件を思い出させる (以前の学習を思い出してもらう)	(導入の中で、Phase 01~03の「気づき」「構造」「可能性」の要点を想起させることで代える)				
4.新しい事項を提示する (学習内容を伝達する)	【Thinking:場を知る】発信の場として「note」の特徴を解説。SNSとの違い(瞬間的反応 vs 整理された思考、断定 vs 迷い)を整理し、デジタル空間には「揺れたまま置ける場所」があることを示す。		10	展開	
5.学習の方針を与える (理解を促進する手法を用いる)	【テーマ選択と対話】3つの執筆テーマ(①スマホを持つ前の自分へ、②10歳の誰かへ、③私なりの距離の取り方)を提示。グループで「どのテーマで書きたいか、その心は？」を短く話し合い、書く意欲を高める。		10		
6.練習の機会を作る	【学習活動:個人ワーク】選んだテーマの「核」を言葉にする。最初から文章にせずキーワードを並べるだけでもOK。立派な意見より、一人の経験としての「本音」に近い言葉を優先して300~400字程度で下書きする。		25	学習活動	
7.フィードバックを与える	【対話:つばやき合う】ペアで下書きを読み合う。ルール:アドバイスや評価は一切せず、「へえ!」「いいな」と感じたところを一つだけ伝える「ポジティブ限定」の感想交換を行う。		15		
8.学習の成果・達成度を評価する	【まとめ】今日書いた言葉はまだ完成ではないが、自分の言葉を「公共空間」に置く準備をした大きな一歩であることを確認する。ワークシートに今日の執筆プロセスで感じた手応えを記録する。		10	まとめ	
9.保持と転移を高める (次の単元への興味をわかせる、忘れないような工夫をする)	【次回予告】次回(第13回)は、今日書いた「核」を実際にnoteの下書き機能に入力し、他者の視点を想像しながらさらに言葉を研ぎ澄ませていくことを予告する。		5		
			合計	90	分

# 授業計画(コマシラバス)／指導案 (ガニエの9教授事象を活用して)

科目名	デジタルシティズンシップ	開講年度	令和8年度	単位数	1
学習タイトル(第13回)	他者を想定した「ことば」をつくる — この言葉は世の中に出せそうか				
学習概要(使用教材・事前学習)	デジタル社会において安全かつ有益に活動するためのリテラシーと態度を養うとともに、自分自身の幸福と他者・社会の幸福をつなげて考える力を育成する。単なる情報モラル教育にとどまらず、情報流通の構造、人間の心理、感情と情報の関係、不都合な真実に向き合う姿勢を扱い、公共性を踏まえた行動選択を実践する。				
学習目標(複数可)	1. 自分の言葉が「自分の手を離れる」という境界線の緊張感を体感し、発信に対する責任感を養う。 2. 「断定の強さ」「主語の大きさ」「感情の温度」といった観点から、自分の文章を客観的に点検できる。 3. 他者からのフィードバック(受け取り方)を知った上で、修正するか、あえて残すかを自ら決定する主体性を発揮する。				
成績(理解度)評価方法					
	指導内容(教員側の働きかけ)	備考	時間		
1.学習者の注意を喚起する (注意をひく、興味を持ってもらう)	【Preparing:準備】「手元にある言葉は自分だけのものだが、一度外に出せば自分の手を離れる」という事実を提示する。送信ボタンを押す手前の「境界線」に立ち止まる感覚に注目させる。		10	導入	
2.授業の目標を共有する	【導入】本日の目的は「誤解されない正解」を作ることではなく、「どう受け取られようか」を予測し、その上でどう出すかを「自分で決める」ことだと伝える。		5		
3.前提条件を思い出させる (以前の学習を思い出してもらう)	(導入の中で、Phase 02で学んだ「誤解・炎上・沈黙」の構造を振り返り、点検の材料として使うことを想起させる)				
4.新しい事項を提示する (学習内容を伝達する)	【Thinking:構造で点検する】文章の点検観点を提示。①断定の強さ(Iメッセージの活用)、②主語の大きさ(「みんな」と一般化していないか)、③感情の温度(刺々しくないか)の3点を解説する。		10	情報提示	
5.学習の方針を与える (理解を促進する手法を用いる)	【操作とマインドセット】noteの下書き機能への入力を指示する。あえて「他人のふり」をして自分の文章を読み返し、「自分はこう言いたい」と「他人はこう受け取るかも」の間にある緊張感を味わうよう促す。		10		
6.練習の機会を作る	【学習活動:Dialog】ペアワーク。お互いの下書きを読み合い、「安心した部分」と「誤解されそうなリスク」のみを事実として伝え合う。※正しさの指摘や修正案は出さないルールを徹底する。		25	学習活動	
7.フィードバックを与える	【対話の深化:選び直す】ペアからの反応を受けて、自分の文章を書き換えるか、あえてそのままにするかを自分で選ぶ。「どう受け取られようかを知った上で選ぶ」ことの大切さを全体にフィードバックする。		15		
8.学習の成果・達成度を評価する	【まとめ】「誤解を知った上で、それでも出すか、出さないか。その判断こそがデジタルシティズンとしての意志である」という本質をまとめ、ワークシートに自分の決断のプロセスを記録する。		10	まとめ	
9.保持と転移を高める (次の単元への興味をわかせる、忘れないような工夫をする)	【次回予告】次回(第14回)は、今日研ぎ澄ませた言葉をデジタルではなく、あえてリアルな教室という物理的な場所に置いて、その「体温」を体感する「note展覧会」を行うことを予告する。		5		
			合計	90	分

# 授業計画(コマシラバス)／指導案 (ガニエの9教授事象を活用して)

科目名	デジタルシティズンシップ	開講年度	令和8年度	単位数	1
学習タイトル(第14回)	言葉を渡しあう — 言葉をデジタルではなく、リアル空間に置く				
学習概要(使用教材・事前学習)	デジタル社会において安全かつ有益に活動するためのリテラシーと態度を養うとともに、自分自身の幸福と他者・社会の幸福をつなげて考える力を育成する。単なる情報モラル教育にとどまらず、情報流通の構造、人間の心理、感情と情報の関係、不都合な真実に向き合う姿勢を扱い、公共性を踏まえた行動選択を実践する。				
学習目標(複数可)	1. 自分の言葉を公共の場に置く(掲示する)ことで生じる緊張感や、他者の反応による心の動きを体感する。 2. SBI(状況・表現・影響)の視点をを用いたフィードバックを実践し、評価ではなく「自分の受け取り」を言葉にする技術を学ぶ。 3. リアルの体験を通じ、デジタル空間における送信ボタンの先にある「体温」や「言葉の重み」を再認識する。				
成績(理解度)評価方法					
	指導内容(教員側の働きかけ)	備考	時間		
1.学習者の注意を喚起する (注意をひく、興味を持ってもらう)	【Sensing:身体感覚への注目】第12～13回を振り返り、今日から「実践」に入ることを宣言する。自分の文章が掲示される前の今の緊張感や、他者の反応への期待・不安をそのまま感じさせる。		10	導入	
2.授業の目標を共有する	【導入】本日の目的は、反応の多さを競うのではなく「出した前後で、自分の内側に何が起きるか」を感じ取ることだと伝える。		5		
3.前提条件を思い出させる (以前の学習を思い出してもらう)	(導入の中で、第13回で「他者の視点」を想像して言葉を研ぎ澄ませたプロセスを想起させる)				
4.新しい事項を提示する (学習内容を伝達する)	【情報提示:SBIフィードバック】評価(いい・悪い)ではなく、自分がどう受け取ったかを返す「SBI」の視点(Situation:状況、Behavior:表現、Impact:自分の心への影響)を解説する。		10	情報提示	
5.学習の方針を与える (理解を促進する手法を用いる)	【理解の促進:場の約束】「note展覧会」のルールを提示:ネット公開しない、評価しない、正解を求めない。人格ではなく表現を見る、決めつけず自分の受け取りとして置く、という3つの視点を徹底する。		10		
6.練習の機会を作る	【学習活動:Exhibition】教室回遊と付箋ワーク。壁に掲示された仲間のnote(下書き)を自由に読み、心に触れた言葉にSBIの視点やマークでコメントを送る。		25	学習活動	
7.フィードバックを与える	【対話:Sharing】3～4人の小グループで対話。「コメントを書くときに迷った理由は?」「コメントをもらってどんな感覚があるか?」など、体験を通じた「肌感覚」を聞き合う。		15		
8.学習の成果・達成度を評価する	【まとめ:Reflection】ワークシートに「リアル体験を経て、デジタルでの言葉の重みはどう変わったか?」を記録する。フィードバックは技術ではなく「姿勢」であることを確認する。		10	まとめ	
9.保持と転移を高める (次の単元への興味をわかせる、忘れないような工夫をする)	【次回予告】「送信ボタンの向こうにいる人間」を感じた本日の体験を、最終回の「オープンダイログ」を通じたさらに深い対話へと繋げることを予告する。		5		
			合計	90	分

# 授業計画(コマシラバス)／指導案 (ガニエの9教授事象を活用して)

科目名	デジタルシティズンシップ	開講年度	令和8年度	単位数	1
学習タイトル(第15回)	私たちが持つちから — 不在と存在の間にある影響力				
学習概要(使用教材・事前学習)	デジタル社会において安全かつ有益に活動するためのリテラシーと態度を養うとともに、自分自身の幸福と他者・社会の幸福をつなげて考える力を育成する。単なる情報モラル教育にとどまらず、情報流通の構造、人間の心理、感情と情報の関係、不都合な真実に向き合う姿勢を扱い、公共性を踏まえた行動選択を実践する。				
学習目標(複数可)	1. 人はその場になくても、自分について語られる言葉から強く影響を受けることを体験的に理解する。 2. 「本人のいないところで本人の話をしない」などのルールを通じ、安全で誠実な対話のあり方を習得する。 3. 15回の旅を振り返り、デジタル社会において「言葉が持つ力」を今後どう扱いたいのか、自分の意志を言語化できる。				
成績(理解度)評価方法	ワーク(6マス自己紹介、定義の作成)への参画度、およびリアクションペーパー(Reflection)の内容。				
	指導内容(教員側の働きかけ)	備考	時間		
1.学習者の注意を喚起する (注意をひく、興味を持ってもらう)	【Sensing:存在への問い】「送信ボタンの先に人はいるか?」という問いを投げかける。デジタル空間で、本人がいない場所で語られる言葉が、どれほどの重みを持つかを直感的に考えさせる。		10	導入	
2.授業の目標を共有する	【導入】最終回のゴールは、正しい作法を学ぶことではなく、言葉が人間に与える影響力を「身体知」として問い直すことであることを提示する。		5		
3.前提条件を思い出させる (以前の学習を思い出してもらう)	(導入の中で、第12回から続いてきた「発信する・関わる」プロセスの集大成であることを想起させる)				
4.新しい事項を提示する (学習内容を伝達する)	【情報提示:オープンダイアログ】「オープンダイアログ」の鉄則を解説。①本人のいないところで本人の話をしない、②本人が聞いている状態で他者同士が語る(リフレクティング)、という特殊な構造を説明する。		10	展開	
5.学習の方針を与える (理解を促進する手法を用いる)	【ワーク説明:タニモクの応用】3人1組のワーク手順を説明。本人は説明後に黙って聞き手に回り、他の2人が本人について「どんな気持ちを受け取ったか」を語る。評価せず、感じたことを置くルールを徹底する。		10		
6.練習の機会を作る	【学習活動:Reflectingワーク】3人グループで1セット実施(時間の関係上、代表1名が本人役を体験、または簡易版で交代)。図や絵をベースに、自分の将来や悩みを「他者に語ってもらう」プロセスを体験する。		25		
7.フィードバックを与える	【対話の深化:体験の共有】「話さずに自分のことを聞く」体験で何を感じたか?「不在」なのにそこに「いる」感覚はあったか?といった肌感覚を小グループや全体で共有する。		15		
8.学習の成果・達成度を評価する	【まとめ:全体リフレクション】ワークシートの「4つの問い」に回答する。自分が「言葉が持つ力」を今後どう扱いたいのか、この15回で得た「自分なりの羅針盤」を言葉にする。		10	まとめ	
9.保持と転移を高める (次の単元への興味をわかせる、忘れないような工夫をする)	【最終クロージング】「デジタル社会で大切なことは、デジタルの外にあるのかもしれない」という最後の問いを贈り、15週間の探究の旅を締めくくる。		5		
			合計	90	分